

『日本軍ムンダ飛行場失陥の危機とコロバンガラ沖夜戦』

基礎知識篇その二十一——空母編、後編の第十四部

ガ島撤収に成功した日本軍は、当初、海軍が建設した最前線飛行場のムンダを足がかりにして再反攻に転じ、あわよくばガ島奪回作戦を展開する構想だったようです。

しかし既述のとおり、ムンダは余りにも貧弱な基地でした。滑走路は狭く短く、零戦以外は離着陸もままならない有り様であり、敵への攻撃どころか、防衛のための高射砲陣地も満足にありません。

これに対する米軍は、ガ島の飛行場群を増設し、以前は後方基地だったエスプリツ・サント島から陸軍重爆撃機隊や新鋭の高速戦闘機隊を進出させてきました。

ガ島の西に隣接していて、撤収作戦の時には撤収部隊の收容基地となったラッセル島（ルッセル島）は、ハルゼーの先遣隊が占領してから直ちに海兵隊の前線本部を置き、専用の飛行場も整備し、その後は長期間にわたりソロモン海兵隊の根拠地となります。

それでもハルゼーは一気に総攻撃をかけず、まず六月二十九日にムンダ対岸のレンドバ島に上陸後、ここに重砲陣地を築き、繰り返し猛烈な砲火をムンダ飛行場に浴びせ続けます。従来の彼としては予想外に慎重な作戦であり、猛将と言われるハルゼーらしくない行動ですが、その真意は今なお誰も正解を提示できません。

おそらくは本稿が示唆したように、かなりの時間的余裕を与えられた米海軍首脳陣が、安全第一の作戦に転換したことが主要な理由と思われるが、ルンガ沖航空戦の実態が明らかになった現在は、この時期の日本海軍航空隊にはまだ米軍が警戒するだけの実力が残っていたというのもまた、ごく自然な結論といえることができます。

いずれにしても、戦後の日本海軍の戦史は大幅に訂正する必要があるようです。少なくとも以前に引用した元軍令部出身の某氏のような説は採ることができません。与えられた戦力差を無視して、一方的に前線將兵の責任とするような不当な発言は厳に慎むべきです。

この時期に最も確かだったのは、まず第一に航空機の生産枠の約半分を確保していた陸軍機が、ソロモン、ニューギニア方面の島嶼戦では全く活動できなかったこと、日本軍とは対照的に、米陸軍の航空隊は、爆撃機、戦闘機共に、期待以上に効果的に太平洋島嶼戦線の勝利に貢献していたという事実です。

欧州戦線への参加はまだ本格的ではありませんから、太平洋戦線に投入された米陸軍機の総数も戦力効果も甚だ大きく、これが徐々にあの精鋭海軍航空隊の体力を蝕んでいたのは確かでした。

第二には、日本海軍航空隊の消耗はまず艦爆と艦攻で顕著だったという事実で、これが日本軍全体の体力の消耗を加速する結果となりました。

松浪少尉の手記が具体的な数字を挙げていますが、零戦と比較しても、艦爆の損害が大きいのが歴然としています。艦攻に至ってはこの頃にはもうその姿を見せることも稀となっていました。

爆弾や魚雷を抱えた艦爆や艦攻は敵機からの攻撃には極めて弱いのです。そのために護衛の零戦が援護するのですが、零戦が敵の戦闘機と戦っている時には無力となってしまうのは避けられないことでした。

この点では米陸軍の重爆撃機は、自機内に護衛の機銃隊を備えているだけでも有利です。また陸軍の高速戦闘機は運動性能では零戦に対抗できないものの、高い位置から一気に日本機を襲い、機銃弾を浴びせてそのまま退避すればもう零戦は追いつくことができません。日本の零戦はこの米軍機の高速度攻撃に苦しめられました。

「斜め銃」を創案し、米軍機銃隊の盲点となっている角度を攻撃する工夫をしたのもこの時期で、また米軍戦闘機隊の複数攻撃に対抗するために、最小編隊の機数を増加したのも（二機から三機へ）この戦訓を採り入れた成果です。

しかしそれらの努力にも限界がありました。最終的には自ら銃武装した大型爆撃機を開発するか、高速機によって敵の攻撃を回避するしかなく、確かにその努力はされたのですが、結局その努力が実らないうちに戦いは終わってしまったのでした。

こうした苦境を脱するために緊急策として採用されたのが、零戦自らが60キロ爆弾を抱えて出撃し、敵艦や輸送船を爆撃する戦法です。これならば、敵の戦闘機に出会えば爆弾を投棄して空中戦を挑むことができますから、それなりの効果は期待できます。

これがやがて体当たり攻撃作戦となり、さらに進んで神風特別攻撃隊となるのですが、この時期はまだ零戦隊も首脳部もその認識には到達していなかったのは確かな事実です。

コロバンガラ島（略称コロ島）攻防戦

ムンダの飛行場を死守するために日本軍は、コロ島を中心とする周辺地域に陸上戦力を集中する策を採ります。

このソロモン中部地域には大小多数の島々があり、それを隔てる海峡がありますから、兵員と必要物資の輸送のための艦船が必要と

なり、それを妨害し撃滅するための海空からの攻撃が触発され、他に例の少ない特殊な戦いが始まったのです。

こうして日本軍と米豪などの連合軍は、駆逐艦を主体とする高速機動艦隊と航空部隊をこの特殊な海域に投入し、これまでの戦闘とは異質な、未知の世界の戦いを展開することになりました。

不思議なことに、あの伊藤正徳は、ソロモン戦では特に後半での損耗が著しく多いことを強調しながら、その原因として「攻撃終末点を越えた結果」と簡単に総括し、後半戦の個々の海空戦についての個別具体的な検証を敢えて回避しています。

彼は一方では、一地域での航空戦の消耗数が最大として、その詳細の数字を丁寧に紹介していますから、これは矛盾した対応です。

おそらくは、一万を越える陸軍部隊が、島から島へと移動する度に海軍の駆逐艦隊が動員され、そこに海戦が勃発するという構図に何らの計画性も合理性も認められず、興味を失ってしまった可能性がありますが、これはいささか早計に過ぎたようです。

というのは、彼自身が意識しない所で、この戦争全体において重大な意味を持つ戦いが幾つも連続して続いていたからです。

(クラ湾夜戦)

米軍のレンドバ上陸以降最初に発生した七月六日夜の海戦です。

ムンダ防衛部隊の増援のためコロ島から出撃。秋山輝男少将以下(新月)を旗艦に駆逐艦十隻を防衛隊3隻、輸送隊7隻に分けて出撃。米軍は巡洋艦3隻、駆逐艦4隻。日本軍は駆逐艦新月が撃沈されながら輸送任務は成功。米巡洋艦ヘレナは沈没。日本軍の駆逐艦長月は敵機の空襲を受けて座礁後放棄。

(七月九日夜のコロ島救助隊出動)

ムンダ防衛に支援部隊が出動して手薄となったため、ラバウル以南の最大の基地ブインより緊急輸送隊が出動。旗艦は重巡「鳴海」と、軽巡「川内」。警戒隊は「雪風」、夕暮、谷風、浜風。輸送隊は皐月、三日月、松風、夕風。各隊の駆逐艦はそれぞれ4隻です。全艦無事に陸軍部隊の輸送任務を成功させて翌日基地に帰着。

(コロンバンガラ沖夜戦)

七月十二日には伊崎俊二少将の第二水雷戦隊が出動。旗艦は軽巡「神通」(じんつう)。駆逐艦は七月九日の輸送作戦の輸送隊から三日月が警戒隊に移動し、谷風に代わって清波が加わり、警戒隊は5隻編成。一方の輸送隊は水無月が加わって4隻編成。

この夜戦では「神通」が敵艦隊の集中砲火を独りで引き受ける形となり、壮絶な「戦死」を遂げて、あのモリソンまでが賛美するほどの死闘の末に快勝しました。

これまでにレーダーの逆探技術を習得していたわが駆逐艦隊は、いち早く暗中の連合軍艦隊の動きを探知し、これが巡洋艦と駆逐艦から成る大艦隊であることを知り、非常手段を決断しました。

伊崎少将は、まだ敵艦隊はわが艦隊の接近に気づいていないが、しかしすでに完全に危険領域に侵入している以上、一分でも早い先制攻撃が必要と判断、自艦隊を敵艦隊の真正面に進撃させます。

戦後判明した連合軍艦隊は、軽巡が3隻。米海軍がホノルルとセントルイスで、ニュージールランド海軍がリアンダー。駆逐艦隊は計10隻。対するわが警戒隊は軽巡1隻、駆逐艦5隻だけでした。

時計はすでに十三日の零時五十五分を示しています。かすかな月明かりの中、距離一万mにそれぞれの艦影が見え始めると、まず連合軍艦隊の軽巡3隻が砲撃を開始し、猛烈な砲火が日本艦隊先頭の「神通」に集中します。

「神通」に注がれた3隻の軽巡の砲弾総数は2630発と記録されています。「神通」の沈没は零時十五分ですから、わずかに二十分でこの数字です。戦死482名、生還者わずかに23名。犠牲艦であると同時に、敵も驚嘆させた海の英雄の壮絶な最後でした。

この間、「神通」の先導艦となった二日月を除く雪風ら4隻は、魚雷発射の最適距離とされる4000mを僅か200m越えた段階で連合軍艦隊の視野に突入。各艦は敵からの砲撃を巧みに回避しながら魚雷発射の機を窺います。

日本軍駆逐艦の魚雷は二十四インチが連装4基で、同時に8本の魚雷を発射できます。対する連合軍のそれは二十一インチで8本発射。しかも日本の駆逐艦は約三十分で再発射可能なのに、連合軍は一回きりの発射です。この海戦では特に二回目での打撃が大きかったと推定されています。

こうして午前一時二十分、雪風以下各艦一斉に魚雷発射。近距離での魚雷戦となれば、もはや連合軍に勝ち目はありません。

四分五裂し、逆に日本軍は4隻が標的を3隻の敵軽巡に合わせ、二十四インチ酸素魚雷を反復して叩き込みました。

連合軍の3隻はすべて大破し、リアンダーは修理回復まで一年以上。ホノルルは九十余日、セントルイスは百日以上、いずれも長期間の脱落を強いられるという大損害で、おまけに駆逐艦一隻までが撃沈されてしまいました。わが軍の駆逐艦の被害はほぼゼロです。

しかも当初の目的であった千二百名の兵員輸送隊が無傷で成功しているのですから、その成果は高く評価することができます。

同時に、ソロモン後半戦の中で、この時期の駆逐艦隊の在り方について一考する必要があります。

伊藤正徳の叙述では、雪風という戦功抜群の名艦への傾倒が強すぎて、戦局全体の中での駆逐艦隊の役割についての検証が希薄になってしまっているように思われます。

この海戦で証明されたように、レーダー面の不利にもかかわらず日本軍駆逐艦隊の戦闘能力はまだ米海軍に劣ってはいません。それを船団護衛に使用するだけならばともかく、輸送任務そのものを使用する決定が、どれほど戦局全体を不利にしましたか、改めて検証する必要があったのです。

それは当時の関係者にとって必要だったというだけではなく、戦後の研究者にとっても、重要な批判項目としてこれから明快な解釈または結論を試みる必要のある領域です。

例えば伊藤正徳の場合、航空部門については、陸軍機はほとんど実戦に参加していないのだから生産割当も海軍に譲るべきだったと明言していますが、駆逐艦についてはそこまでの明白な証言に至っておりません。彼に限らず、戦後の研究者たちもほぼ同様な対応ですが、航空機部門と同じく、この要素を無視してソロモン戦を語ることはできないというのが事実なのです。

実は現実の歴史がそれを証明していました。

『コロバンガラ島撤収作戦』

ガ島撤収作戦自体も決して正当に評価されてはいませんが、救出された人数がほぼ同じにもかかわらず（約一万二千人）、K o l o m b a n g a r a 撤収作戦については、語る人も知る人も稀です。

ガ島撤収作戦は、計算し尽くされた緻密な計画であり、敵を欺く陽動作戦の鮮やかさもあり、悲惨な戦闘に追いこまれていた将兵たちにとっては文字通り暗夜の救世主の役割を果たしましたが、コロバンガラ島撤収作戦については、未だに謎が多いままなのです。

まずコロバンガラ島にそれだけの人数の陸軍部隊が集結したのが、果たして綿密な計画に基づいていたかどうか怪しいのです。

全体の戦局の中でソロモン諸島の立地が重要なのは誰にでも分かります。陸海軍を問わず、今度の戦争の原因が南方資源地帯の確保であったことは、いわば自明の大前提でした。

このために遠くガ島まで進んで飛行場を建設しようとし、それを一旦奪われると、奪回のために数万の陸軍部隊が上陸し、近代化された米軍の機械力と装備の前に敗れ去ったのでした。

ここに来てもまだ陸軍側がガ島奪回を諦めていなかったことは、次ぎ次に兵力を投入してきたことでも明らかです。

陸軍は常に土地の占拠という意識から離れることはできません。海軍の場合の目的は制空権と制海権の確保ですから、或る段階までは陸海軍の意志統一ができて、最終的に必ず一致することが期待できるものではありません。

海軍は確かにムンダ飛行場の確保を期待していました。ソロモンの空と海を守り、南方の経済圏を維持し確保するには、ラバウルの先に在るブインとムンダの飛行場は必要な存在です。

しかしこのころすでに日本海軍は、陸軍の戦力の限界に気付いていました。何よりも洋上飛行のできない航空機ではどうにも戦力になりませんし、搭載された火砲の威力、装甲、速度のどれ一つを取っても日本軍の戦車は国際水準を大きく下回っています。

これではどんなに兵士の数を集めても、みすみす犠牲者を増やすだけです。

八月四日、ついに海軍はムンダの放棄を決定。この時に海軍側から、すでに航空勢力が枯渇し、制空権の確保が不可能となったことと、海上勢力（具体的には駆逐艦）も燃料不足によって著るしく行動力が失われている実態が通告されたとの記録が残っています。

さらに衝撃的だったのは、この直後、米軍の先遣隊がコロ島の西のベラ・ラ・ベラ島に上陸したという報告が入ったことです。

この蛙跳び作戦が決定打となって、ついに陸軍もコロ島撤退に踏切りました。

海軍の支援について陸海軍の間で激しい応酬があったようです。

約一万二千人という残留陸軍兵（熊本の第六師団が主）はほぼガ島の残留部隊と同数ですから、陸軍は海軍に同数程度の駆逐艦の投入を期待したようですが、すでに海軍の消耗は著しく、逆に米軍は飛行場の増設・整備が大幅に進んでいて、大規模な艦艇の参加は自殺行為です。現に、ムンダ撤収直後の八月六日には駆逐艦の輸送部隊の3隻を失うという損害を受けています。

結論として、海軍は伊集院松治大佐指揮下に軽巡1、駆逐艦12を配し、輸送業務は陸軍が大発によって決行することになります。

（以下次に続く）